

平成 30 年 6 月 8 日現在

機関番号：82619

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26770056

研究課題名(和文)法隆寺献納宝物と正倉院宝物における上代染織作品の研究

研究課題名(英文)Research on Ancient Textile Objects from the Horyuji and Shosoin Treasures

研究代表者

三田 覚之(MITA, KAKUYUKI)

独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸企画部・研究員

研究者番号：00710493

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：法隆寺献納宝物の染織品には、いまだ約千点の未整理品が存在している。本研究においてはこれらを含めた全作品に対し調査と分類を行った。これにより作品の全体像が把握できたことで、今後行われる修理作業をより高い精度で行うことが可能となった。また未整理品を整理していくなかで、飛鳥時代に遡る木簡を8点発見することができた。これは伝世作品としては国内最古のものであり、法隆寺に伝来したことも明らかであることから、史料的价值が極めて高いものであった。このため、この木簡については奈良文化財研究所と共同で調査を行い、その成果については報道発表するとともに、論文を刊行した。

研究成果の概要(英文)：The Collection of Horyuji Treasures at the Tokyo National Museum includes approximately 1,000 unsorted textile objects. This research project consisted of examining and categorizing all of these objects. It provided us with an overview of these objects that will allow us to conserve them with more precision. This project also led to the discovery of eight wooden slips dating back to the Asuka period. These slips are of immense historical value because they are the oldest slips in Japan to have been passed down to the present, and because they were without a doubt passed down at Horyuji. We conducted an examination of these slips in cooperation with the Nara National Research Institute for Cultural Properties, reported our findings to the press, and published a research paper.

研究分野：日本東洋美術史

キーワード：法隆寺献納宝物 正倉院宝物 染織 美術史 文化財保存

1. 研究開始当初の背景

東京国立博物館が所蔵する法隆寺献納宝物の染織品は、断片と化した作品を和紙で裏打ちし、形状を復元することで展示に活用されてきた。しかし、いまだ未整理品が約千件あるように、その全体像は把握されてこなかった。このため修理完了後に本来一個体をなす断片が発見されることがしばしばあり、問題を残していた。このため、未整理品も含めた作品の全体について基本的なデータをまとめ分類する必要がある。

2. 研究の目的

法隆寺献納宝物として東京国立博物館が所蔵する法隆寺伝来の上代裂(じょうだいぎれ、古代の織物)を中心に、献納宝物及び正倉院宝物の歴史的・文化的背景を造形の側から明らかにするとともに、現在バラバラの状態である保管されている上代裂について、本来作品として仕立てられていた当時の組み合わせを作品調査に基づいて明らかにする。また、未解明な部分が多い法隆寺裂の全体像(数量・技法・文様)についても作品調査と写真撮影によってデータベース化を図ることを目的としている。

3. 研究の方法

染織作品の調査には、まず何よりも実物にあたり、作品の大きさや織密度、技法の詳細を記録し、あわせてスケール入りの写真を撮影することが必要である。このため、東京国立博物館が所蔵する未整理品を含めた法隆寺裂の全件に対し撮影を行い、技法や文様、色等によって分類を行った。また各地の美術館・博物館・個人が所蔵している法隆寺・正倉院伝来の染織作品についても分類を行い、博物館所蔵品のデータに反映させた。

4. 研究成果

法隆寺献納宝物に含まれる染織品の全てに対し分類を行ったが、ここでは代表的な織物である錦と綾について記す。まず錦については、幾何文 13 種、幾何植物文 15 種、植物文 22 種、花鳥文 3 種、人物・瑞獣文 15 種、狩猟文 3 種、雲気文 1 種、広東錦 10 種(計 82 種)が判明した。次に綾については、幾何文 77 種、幾何動植物文 8 種、植物文 9 種、鳥獣文 27 種、人物文 1 種、器物文 1 種(計 123 種)が判明した。この成果は今後刊行が予定の法隆寺献納宝物特別調査概報に反映させる予定である。なお、一部のデータについては沢田むつ代氏の科研報告書『東京国立博物館所蔵 法隆寺伝来 飛鳥・奈良時代の染織品』に反映させた。

またこの分類によって法隆寺裂の全体像が把握できたことにより、現在解体修理中の「裳」(未整理品から見出された伎楽装束)について、本来一個体を形成していた各断片を集合させ、より当初の形状に近いかたちで復元する修理作業が可能となった。

今後とも、東京国立博物館における法隆寺裂の修理は継続していくが、今回の研究成果を反映させることで、より精度の高い修理が実現できるものと期待する。

またこの調査にともない未整理品を整理していくなかで、飛鳥時代に遡る木簡を 8 点発見することができた。これは伝世作品としては国内最古のものであり、法隆寺に伝来したことも明らかであることから、その史料価値は極めて高いものであった。このため、この木簡については奈良文化財研究所と共同で調査を行い、その成果については報道発表するとともに、論文を刊行した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 9 件)

・三田覚之「聖徳太子ゆかりの宝物 天寿国繡帳と呉竹形の塵尾」、『季刊 明日香風』131 号、公益財団法人 古都飛鳥保存財団、平成 26 年 7 月 1 日、査読無

・三田覚之(沢田むつ代氏と共著)「法隆寺伝来・上代裂 綾幡足と錦残欠等 平成 22 年度修理の成果」、『平成 27 年 4 月、MUSEUM 第 655 号、東京国立博物館、査読あり

要旨：本稿は平成 22 年度から計 4 ヶ年度をかけた行われた法隆寺伝来の染織品修理に関する第 1 回目の報告である。ここでは平成 22 年度に行った 12 件の修理に関する詳細とともに、修理対象となった染織品の当館における伝来について記述した。

当館の列品台帳において、修理対象作品の「古裂」(I-336)は「伝来未詳」とされるものの、内容からして明治 11 年に法隆寺から日本の皇室へ献納された法隆寺献納宝物の一部と考えられる。献納時に作成された目録には塵芥をおさめた櫃の存在が記されており、修理対象作品を含む当館所蔵の上代裂には、本来この櫃に納められていた作品が多く含まれていると考えられる。これまでの研究史において、この櫃が取り上げられることはほとんどなかったが、この度の修理事業に関連する調査で、該当作品と見られる唐櫃が見出されたため、本稿ではその報告も行った。さて、修理対象作品の上代裂は、昭和 12 年にガラス板に挟む整理が行われ、そのままの状態である保管されてきた。しかし、経年による変化により、ガラス内面には白い結晶状の曇りが生じており、それが裂を取り巻くように広がっていた。またガラス内での裂の移動が確認できるものもあり、保存環境として問題のある状態が続いていた。

そこで今回の修理ではガラスを解体し、水分を与えつつ作品の歪みをただし、小麦粉澱粉糊を用いて楮紙による裏打ちを行った。その上で中性紙によるウィンドウマット装によって保護することにより、作品の状態が安定

化し、安全に展示することが可能となったのである。

・三田覚之「法隆寺伝来 描繪綾天蓋垂飾」
平成 27 年 6 月、MUSEUM 第 656 号、東京国立博物館、査読あり

要旨：東京国立博物館では、平成 22 年度から 4 か年度にわたって、法隆寺伝来の上代裂（飛鳥から奈良時代に制作された織物。列品番号は I 336 1~112。列品名称「古裂」）に対する修理を行ってきた。事業の詳細は、本誌において年度ごとに報告を行うが、中でも重要な作品について詳述するため、小稿を設けた。

ここに取り上げる 2 点の描繪綾天蓋垂飾は、彩色を施した天蓋の垂れ飾りである。これまで研究史上で注目されることはほとんどなかったが、絹に描かれた絵画作品としては日本最古と考え得るもので、重要な作品である。さて、2 点の描繪綾天蓋垂飾には、踊るように身をうねらせた白虎と描くものと、後ろ足で立ち上がる雄鹿を描いたものがある。その絵画様式は朝鮮半島の高句麗や百済と近い関係にあり、例えば白虎を例にとると、初唐絵画の影響下にある奈良県明日香村のキトラ古墳や高松塚古墳の作例よりも古い様式を示している。具体的な制作年代については、関連する染織作品との比較から 7 世紀後半と想定したが、絵画様式について言えば、6 世紀末から 7 世紀前半の朝鮮半島に源流を求めることができる。

『日本書紀』の記述からもわかるように、7 世紀の我が国では朝鮮半島系の画師が活躍していたが、これまで当初の構図や彩色がしっかり遺る古代朝鮮の影響を受けた作例は見出されてこなかった。そうした中で、描繪綾天蓋垂飾は生きいきとした筆致を今に伝える奇跡的な存在であり、我が国の絵画史上にも重要な位置を占めると言えるだろう。

・三田覚之「百済の舍利莊嚴美術を通じてみた法隆寺伝来の工芸作品 法隆寺献納宝物の脚付鉢と法隆寺五重塔の舍利瓶を中心に」
平成 27 年 10 月、MUSEUM 第 658 号、東京国立博物館、査読あり

要旨：本稿は法隆寺献納宝物の脚付鉢（丈の高い高台がついた金属製の椀）と法隆寺の五重塔に埋納安置されている舍利瓶（釈迦の遺骨を収めているとされるガラス瓶）を中心として、百済美術との関連を考察するものである。

近年韓国においては百済時代の重要な舍利莊嚴具が相次いで出土し、百済美術を考えるうえで大きな情報を提供している。韓国における考古学的成果と照らし合わせることで、これまで作品の示す様式から具体的に考察されてこなかった脚付鉢や舍利瓶の様式や製作年代を位置付けることが可能となった。なかでも特に注目したいのは、百済の王興寺址から出土した青銅製舍利盒（青銅でできた

舍利瓶を収める容器）と献納宝物の脚付鉢において、鈕（つまみ）の形が大変に近似していることである。全体として宝珠形を呈し、側面に四弁花文を刻む鈕は、益山弥勒寺址西石塔出土の金銅製舍利外壺や王宮里五層石塔出土の金製舍利内函にも見られ、百済の様式に属すと考え得る。これにより献納宝物の脚付鉢は 6 世紀後半頃、王興寺の青銅製舍利盒と近い環境で製作された可能性が考えられる。

また法隆寺の舍利瓶については同寺が再建された 7 世紀末頃の制作と考えられてきたが、緑色のガラス瓶に宝珠形の頭をもつ栓を挿し込む点は、益山の王宮里五層石塔より出土した緑琉璃舍利瓶と近く、百済美術と造形上のつながりを持つ。法隆寺再建期を遡る遺品と明確に示すことはできないが、その製作は法隆寺の前身である斑鳩寺の時代にまで遡る可能性が考えられる。

・三田覚之「多武峯伝来 十一面観音菩薩立像について」
平成 28 年 2 月、MUSEUM 第 660 号、東京国立博物館、査読あり

要旨：かつて、奈良の多武峯に伝来した十一面観音菩薩立像は、中国唐時代（7 世紀）に制作された白檀像の名品として知られる。本像の特異な点として、足柄が右足にしかないことが挙げられる。左足は甲から先が後補に代わっているため、これまで左の足柄は修理に際して切り落とされたと考えられてきた。だが、残る右の足柄は踵から指の付け根まで大きく刻み出されており、左足も同様であったとすると、割損時にはなお三分の程度が残っていたはずである。それを修理に際して切り落とし、構造を不安定にしまうのは、修理として不自然に思う。

足柄が当初から片方のみだったとした場合、そこには何か意味があるのだろうか。白檀による十一面観音の制作について述べた仏典（『仏説十一面観世音神呪経』、『十一面観世音神呪経』、『十一面神呪心経』）によると、白檀像を用いた儀式が完結するとき、修行者のもとに観音菩薩が訪れ、像が揺れ動くとき、儀式においては像に「動く者よ、動く者よ、震え立つ者よ、震え立つ者よ」とサンスクリット語で呼び掛けることが説かれる。これにより、片方の足柄という不安定な構造は、観音の訪れを視覚的に認めるための仕様である可能性が考えられないだろうか。本像とともに唐代の白檀像として著名な奈良・法隆寺の九面観音像には、頭上と両耳に本体と同じ一材から彫り出された揺れ動く円環があり、同様に理解することができるように思う。また本稿では制作すべき白檀像の大きさとして仏典に記される「一揅（ちやく）手半（一揅は親指と中指を張った長さ）」という記述に注目し、唐時代の僧侶、道宣が遺した記述から、それが約 36.7 センチと理解されていたことを示した。また仏典中には同じく白檀像の大きさとして「一尺三寸」とも記さ

れるが、唐時代の小尺（一尺は約 24.5 センチ）で換算すると、多武峯伝来像の足から白毫までの高さが、ほぼ一尺三寸に該当することも指摘した。

・三田覚之「法隆寺伝来「古裂」の本格修理に伴う配置復元について」、平成 28 年 6 月、『MUSEUM』第 662 号、東京国立博物館、査読あり

要旨：東京国立博物館では、飛鳥から奈良時代に製作された染織品の修理を継続的に行なっている。2010 年度から 2013 年度にかけては、もと奈良の法隆寺に伝来し、ガラス板に挟んだ状態で保管されてきた染織品について四年度間にわたり修理を行なった。館の記録によると、これらの染織品は 1937 年にガラス挟みとなっているが、80 年近い年月が経過した結果、内面には白い曇りが広がり、展示できない状況が続いてきた。またガラス板から裂を取り出してみると、たいへん硬化の進んでいることが解り、総合的な判断から今回の本格修理が行なわれたのである。

さて、古代の染織品を修理する場合、水分を与えたくて糸目を揃え、歪みや亀裂を補正する必要がある。長年のあいだに生じた歪みにより、経糸と緯糸の方向にズレが生じ、それによって引き裂いたような亀裂が生じる。経・緯の糸目を揃えることで織物は本来の平滑さを取り戻し、均一に和紙で裏打ちすることが可能となる。

この糸目揃えの作業では大なり小なり断片相互の配置復元を行なう。離れ離れになっていた断片も、糸目を揃え、相互の関係を探ることによって本来の位置関係を特定、または推定することができるからである。そのため、本格修理の前後では作品の形状に変化が生じることがあるが、その細かな説明はあまりされることがない。

小稿では 2012 年度と 2013 年度に修理した染織品のなかから、文様に基づいて筆者が配置復元した作品を取り上げ、作品の概要を述べたくて、配置復元の根拠を示し、さらに復元から見えてくる文様の特徴や美術史上の位置付けについて考察した。

・三田覚之（渡辺晃宏氏と共著）「法隆寺献納宝物の木簡について」、平成 29 年 10 月、『MUSEUM』第 670 号、東京国立博物館、査読あり

要旨：東京国立博物館の未整理資料から、新たに幡芯板が発見された。幡芯板とは、幡という仏教儀礼で用いる細長い旗が歪まないよう、幡の本体上部に挿し込まれた板のことである。

8 枚の幡芯板には「千字文」の習字や、尼僧の名前、さらに塩などの売買記録が墨書されており、木簡（木の板に記された古代の書類）を転用していることが分かる。保存状態のよい幡芯板を見ると、二次利用をした際に両端を斜めに切る加工が施されている。

さて、これら 8 枚の木簡は「第四 新羅墨」と朱書きされた和紙に包まれていた。「新羅墨」は正倉院の所蔵品であるため、もとは正倉院に置かれていた時期があったと判明する。

法隆寺献納宝物は明治 11 年に奈良・法隆寺から皇室に献納された後、同 15 年まで、正倉院で保管されていた。明治 12 年に正倉院で記された「法隆寺献納物の塵芥櫃」という書類には「幡木材片 壹括」との記載があり、今回見出された幡芯板を指すと考えられる。朴訥とした書風や、日付を記す場合の「月生」などの特殊な用語から 7 世紀に遡ると見られ、伝世品（土に埋もれることなく伝えられた品物）としては最古級の木簡と考えられる。木簡に記された墨書の内容は、古代の寺院生活を考える上でも貴重な資料であり、今後の研究が期待される。

・三田覚之（渡辺晃宏氏と共著）「奈良・法隆寺献納宝物」、平成 29 年 11 月、『木簡研究』第 39 号、木簡学会、査読あり

・三田覚之（藤岡穰氏ほかと共著）「飛鳥寺本尊 銅造釈迦如来坐像（重要文化財）調査報告」、『鹿園雑集 奈良国立博物館研究紀要』第 19 号、奈良国立博物館、査読あり

〔学会発表〕（計 8 件）

・三田覚之「法隆寺献納宝物における百済系文物」、平成 26 年 10 月 29 日、韓国国立中央博物館

・三田覚之「日本・韓国 学術交流報告会 - 法隆寺献納宝物の源流を求めて - 」、平成 26 年 12 月 18 日、東京国立博物館

・三田覚之「百済の舍利莊嚴美術を通じてみた法隆寺伝来の工芸作品」、平成 27 年 10 月 16 日、国際シンポジウム「古代仏塔舍利莊嚴と東アジア仏教文化」、ソウル古宮博物館

・三田覚之「法隆寺献納宝物の幡と木簡について」、平成 28 年 12 月 3 日、木簡学会、奈良文化財研究所

・三田覚之「おひなさまと日本の人形」平成 29 年 3 月 2 日、ギャラリートーク、東京国立博物館

・三田覚之「甦る飛鳥時代の白虎！」平成 29 年 8 月 4 日、ギャラリートーク、東京国立博物館

・三田覚之「聖徳太子の伝説と法隆寺献納宝物」平成 29 年 8 月 12 日、月例講演会、東京国立博物館

・三田覚之「壁画にみる観音経の物語」平成

30年1月19日、特別展「仁和寺と御室派のみほとけ 天平と真言密教の名宝」フォーラム(1)「観音堂解体修理の最新報告」、東京国立博物館

〔図書〕(計7件)

・三田覚之「玉虫厨子本尊変遷考」、『仏教美術論集 3 図像学 イメージの成立と伝承(浄土教・説話画)』、竹林舎、平成26年5月1日、査読無

・三田覚之「武者塚古墳出土の銀帯状金具と宝珠形中心飾の源流」、『上高津貝塚ふるさと歴史の広場 第13回特別展 武者塚古墳とその時代』、上高津貝塚ふるさと歴史の広場、平成26年10月15日、査読無

・三田覚之『おひなさまと日本の人形』、東京国立博物館、平成28年2月、査読無

・三田覚之「海を渡ってきた文様」、『平成28年12月、『別冊太陽 古墳時代美術図鑑(別冊太陽 日本のごころ)』、査読なし

・三田覚之(編集)『法隆寺献納宝物特別調査概報 古今目録抄3』、平成29年3月、東京国立博物館

・三田覚之(韓国中央博物館、藤岡穰氏ほかと共著)『日韓 金銅半跏思惟像 科学的調査に基づく研究報告』、平成29年12月、韓国中央博物館

・三田覚之(編集)『法隆寺献納宝物特別調査概報 古今目録抄4』、平成30年3月、東京国立博物館

・三田覚之(沢田むつ代氏と共著)『東京国立博物館所蔵 法隆寺伝来 飛鳥・奈良時代の染織品』、平成30年3月、東京国立博物館

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：

取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三田覚之(MITA kakuyuki)
独立行政法人 国立文化財機構 東京国立博物館・学芸企画部・研究員
研究者番号：00710493

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()